

お話をよく聞く子どもを育てる

阿弥陀さま・お釈迦さま・親鸞さまのお話を聞いて、
やさしいこころを育む。

まことの
保 育



浄土真宗本願寺派
保育連盟

まことの保育4月号に「仏さまに出遇うと 本当の自分に出遇う」(今月のことば 小池秀章)とありました。親鸞さまはどのようにして仏さまに出遇われたのでしょうか。「親鸞さまのお話を聞いて、やさしいこころを育む」という副題をいただいて、親鸞さまのやさしさを考えてみました。

親鸞さまは「遇う」という漢字をよくお使いになりました。「たまたまあう」という意味です。人生の中で出遇いは不思議です。

遇うこと不思議。つくづく不思議です。「パパとママはどこでどうしてであったの?」と聞かれることはありませんか。子どもなりにドキドキして聞くものです。

つい先日ご法要の席でそんなことが話題になりました。若いママが「私たちはアメリカで不思議なご縁で出会いました。世界中を揺るがす事件が起きて帰国が延期になり、そのとき友人のパーティーであったんです。それを聞いていた小学校低学年の息子さんが急に中島みゆきの名曲「糸」を振りつけて歌い始めました。「なぜめぐり逢うのかを私たちは何も知らない…」と。一同爆笑になりました。

出遇いは偶然です。偶然から始まりますが、そこからかけがえのない人生が動き出し、また家族となるいのちも誕生します。

親鸞さまは9歳で家族から離れ、比叡山で20年間ご修行とお勉強をされましたが、どうしても迷いからは脱けられず苦しんでおられました。29歳の時、法然さまに出遇い、そして阿弥陀さまの願いに出遇うことが出来ました。それをたいそう喜ばれました。

阿弥陀さまの願いは「どんな一人一人も尊いいのちをいただいている」「それはみんなちがっていて、だから誰にも代わってもらえない」「いのちの尊さに優劣はなく、それぞれに輝いてほしい」というものでした。

親鸞さまにとって阿弥陀さまとの出遇いは「お坊さんでも結婚してもいいんだよ。家庭を持つてもいいんだよ」であったかもしれませんが。家庭を持つことは心配する家族が増えることです。親鸞さまはお坊さんでありながら堂々と結婚されました。心配することは人を思うことでもあります。親鸞さまのご生涯は心配事や悩みに満ちていました。心配するたびに、「心配するあなたを必要としているひとがいるからです」と阿弥陀さまの声を聞かれていたのかもしれない。

自分のことをいつも心配してくれる人がいると気がついたとき、それがやさしさにつながります。お子様が園で過ごす一日は不思議な出遇いに満ちています。園からお家に帰るとき「今日こんなことがあったよ」とお話しするお子様の言葉に耳を傾けてください。不思議な出遇いを共にしながら親子になれた喜びをかみしめてください。

まことの保育の願い